

唱歌教育の受容・消費と国民意識に関する社会学的考察

——長野県高遠町における聞き取り調査をもとに——

比較教育社会学研究室 西 島 央

A Sociological Study on Acceptance and Consumption of Singing Education and National Consciousness
- Based on Interview at Takato, Nagano Prefecture -

Hiroshi, NISHIJIMA

In this paper I try to clarify the function of school education in national integration through music education. As a part of this effort, I traced back memories of people on “singing” who went to elementary schools from the middle of the Taisho Period to the first part of the Showa Period. The purpose of this paper is to observe how people accepted and consumed the contents and method of “singing” to form their national consciousness.

From the standpoint of acceptance of “singing”, I examined the structure of “singing”, explanation on lyrics, and relations between songs called “shoka” and ritual songs. As a result, it was made clear that as for the structure of “singing”, singing in unison by the whole class was repeated in almost the same fashion as the educational plans written in teaching manuals. Many of the people, however, do not remember if there was any explanation on the contents of lyrics and only few people remembered explanation related to any ideology.

Regarding consumption of “singing”, I examined people’s memories and reasons for liking for particular songs. It was concluded that there were some patterns for those points and that family background, individual experience and inclination gave influence.

Judging from those observations, it is hardly possible to establish the conventional explanation that the state tried to integrate the people and internalized within them the ideology of Emperor system and the militaristic nationalism through explanation on lyrics. Supposing sense of unity as the people were established and monolithic nationalism were formed by sharing melodies and lyrics of songs through experience of singing in unison, in actuality, it could be said that the people based on totally different reasons and memories, share songs, which should be the source of the sense of unity.

In conclusion, it can be said that songs, which is consumed very differently by individual levels, hardly managed to maintain national integration through their melodies and lyrics themselves.

目 次

はじめに

I. 先行研究の検討と課題の設定

II. 調査の概要

III. 唱歌教育と唱歌の受容

A. 唱歌科の授業実施状況と授業構成

1. 唱歌科の授業実施状況

- 2. 唱歌科の授業構成
 - B. 唱歌の歌詞に関する説明内容
 - C. 唱歌と式歌との関係
- IV. 唱歌教育と唱歌の消費
 - A. 好きな唱歌について、好きな理由や思い出
 - B. 唱歌と式歌の関係の捉え方
- V. 考察

はじめに

本稿は、音楽教育を題材にして学校教育の国民統合機能を明らかにする試みの一環として、我が国の大正中期から昭和初期までの時期を対象に、その当時尋常小学校に通った人々の唱歌科の授業に関する記憶をたどることを通して、人々が唱歌教育の教育内容や教育方法をどのように受容し、消費してきたのかということを明らかにし、唱歌教育や唱歌¹⁾の受容と消費を通してどのような国民意識を形成してきたのかということについて考察することを目的とする。

I. 先行研究の検討と課題の設定

従来、音楽教育の歴史研究では、戦前期の唱歌教育の社会的役割について、政治学的な問題設定のもとで、公権力が唱歌教育を国民統合の確立、とくに天皇制イデオロギーや軍国主義的ナショナリズムといった公定イデオロギーを伝達するための手段として道具的に用いていたことと、唱歌教育や唱歌がその役割を果たしていたことを、主に次のような観点から論じて、そのイデオロギー性を問題にしてきている。すなわち、第一に、唱歌科の公定の目的を「徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」と定めた明治四十年小学校令などを引き合いに出して論じる制度史的な考察。第二に、唐沢（1956）が戦前期の国定教科書の各期ごとの特徴を分析した際に行ったような、唱歌の歌詞分析を通じた考察。第三に、園部・山住（1962）が問答法に注目して行ったような、当時の教案などをもとにした唱歌科の授業構成や授業内容の分析を通じた考察である。

しかし、社会学的にみたとき、それらの研究には次の2点について不十分な点があった。

第一に、国家と国民との関係を捉える際に、政治的・経済的同一性のような公権力のイデオロギーによる国民統合という国民の編制原理しか考慮してきていなかったことである。

社会学的にみたとき、国民国家とは、歴史的地理的に

恣意性を有する擬制的共同体にすぎないので、国民の編制原理としては、上述の編制原理の前提として、言語的、領域的、文化的要因が組み合わされた生活様式の同一性による国民統合という側面が必要であると考えられる。

そこで筆者はこれまでに、このふたつの国民の編制原理に対応して、国民一体性の意識＝ナショナル・アイデンティティにもふたつの側面があると論じて、前者の国民編制原理によって確立されるナショナル・アイデンティティをネーション意識、後者をカントリー意識と仮説的に設定した²⁾（西島1995a）。そして、カントリー意識が唱歌教育を通してどのように形成されていくのかを明らかにするために、まず教育内容に注目して検討した。その結果、唱歌科は他教科と比べたとき、歌詞のなかにカントリー意識にかかわる文化的規範を詠み込んだ内容が多いこと、その内容について、公権力によって新たに作りだされたものではあるが、多くが言文一致体で書かれていること、匿名性や一人称であることなどの特徴をもっていること、さらにそれらが容易にネーション意識にかかわる内容のものとながれていることなどを明らかにしてきた。（西島1995a, 1995b）

第二に、唱歌科の授業が実際に、制度的に規定された唱歌教育の目的に向けて、規定された教育内容にそって、教授法の解説書に示されたような方法で行われていたのか、そしてそれを通して、唱歌教育に課された天皇制イデオロギーや軍国主義的ナショナリズムなどの伝達による国民統合という役割を果たしていたのかということについて、実証的な検討をほとんどしてこなかったことである。

この点に関して、筆者は先に、国民国家を擬制的共同体として捉えたとき、国民国家の形成期にあつて学校教育が国民統合のためにどのように機能したかを検討するには、グラムシのヘゲモニー装置という概念を用いるのがもっとも妥当な捉え方であると論じた。そのうえでまず、どのような方法で公定イデオロギーや文化的規範を伝達したかという「伝達のプロセス」を明らかにするために、唱歌科の教授法の解説書に示された教案から読みとれる唱歌科の授業構成に注目して検討した。その結果、唱歌科の授業の構成が、明治前期の「学習の成果としての歌唱」という授業から「唱歌によって教育する」授業を経て、大正初期には「唱歌を教育する」授業へと移り変わっていった過程の整理と、それぞれの時期の「伝達のプロセス」に関する考察を通して、唱歌科がヘゲモニー装置としての機能をもつに至ったことを明らかにした（西島1997）。

だが、筆者がこれまで行ってきたこれら2点の検討に関して、以下に述べるような理由から、さらに少なくとも次の課題にとりくむ必要がある。つまり、「国民統合のための装置や実践に人々がどうかかわっていたのかという、受容と消費の実態と、それによるヘゲモニー形成の様子を明らかにすること」である³⁾。

広田(1995)は、従来の〈天皇制と教育〉に関する研究について、公定イデオロギーと実際の人々のもつ意識との間にズレがある可能性を指摘して、従来の研究が「内面化」という概念によって両者をつなぎ、それを人々の意識や行動を説明する際の前提としており、実際に人々が公定イデオロギーをどう受けとめたかということについて実証してこなかったと批判している。この広田の指摘に従えば、筆者のこれまでの試みは、公権力が意図した公定イデオロギーや文化的規範が、法規定などの制度や唱歌の歌詞のなかにどう織りこまれているか、それをどういう方法で伝達しようとしたかを分析したにとどまっており、唱歌教育が実際に国民統合の機能を果たしたかどうかは、公定イデオロギーや文化的規範を伝達された人々の意識を検討してはじめて明らかになると考えられるからである⁴⁾。

そこで本稿では、人々の意識を検討するために、国民統合のために公権力が用意した法規定などの制度や学校の授業などの実践に人々がどうかかわっていたのかという、受容と消費の実態を明らかにしていくことを課題とする。より具体的には、公権力が唱歌教育を通して人々に伝えようとしたものが、人々にはどのように受けとめられ、どのように消費されたのか、その結果として唱歌教育や唱歌を通して人々の間に国民意識というものがどのように形成されてきたと考えられるのかということを検討していく。

人々の意識を検討するにあたって、受容と消費という観点から捉える必要があるのは、以下のような理由による。

まず受容に関しては、広田が指摘したように、公定イデオロギーの伝達にしてもヘゲモニーやナショナリズムの形成にしても、公権力の意図した内容が意図した方法でそのまま人々に伝わるという保証はない。そこには誤差やぶれが必ず生じるのであり、それを考慮する必要がある。そこで、公権力側の意図した内容の検討にとどまらず、それを人々がどう受けとめたのか、公権力側の意図とのズレがあるのかないのかを検討するべく、受容という考え方をを用いることにする。

次に消費に関してであるが、B. アンダーソンは、言

語のもつ同時存在的な共同性について次のように述べている。

「例えば、国民的祭日に歌われる国歌を例にとろう。たとえいかにその歌詞が陳腐で曲が凡庸であろうとも、この歌唱には同時性の経験がこめられている。正確にまったく同じ時に、おたがしまったく知らない人々が、同じメロディーに合わせて同じ歌詞を発する。このイメージ―斉唱。」(訳書1987 249頁)

ここでは、斉唱という音楽行動の経験の共有と同時に、国歌の歌詞や旋律の共有によって、人々が国家を想像し、国民としての一体感＝ナショナル・アイデンティティをもつようになることが指摘されている。

だが、国歌―歌詞や旋律―に限らず、唱歌―歌詞や旋律―とは、それじしんのみで存在するのではなく、それが表象する表象対象と、それを解釈する人々がいてはじめてなりたっているものである。そのように考えたとき、唱歌教育を通して、人々の間に一枚岩的なイデオロギーを伝達したり、ヘゲモニーやナショナリズムを形成させたりすることができたのだろうか、という疑問が生じる。実際、吉野(1997)は、企業人と教育者に対する聞き取り調査を通して、日本人論の消費のしかたには所属集団によって違いがあることを描き出しているが、その考え方を援用するならば、唱歌教育を通して人々の形成したイデオロギーやヘゲモニーやナショナリズムは、その立場や地位に応じて、公権力の意図とは違う理解のされ方をしていたり、個々人で異なる内容のものであったりしているかもしれないことを考慮する必要がある。そこで、人々がそれぞれ唱歌教育をどのように体験し、唱歌―歌詞や旋律―にどのような意味づけをしてきているのかを検討するべく、消費という考え方をを用いることにする。

なお、そのような考慮をしたばあい、国民統合の対概念として人々の意識を「ナショナル・アイデンティティ」として捉えるのは、必ずしも好ましいものではない。「ナショナル・アイデンティティ」という概念には、一国の国民すべてに共有された同一性ないし一体性の意識という意味合いがこめられているが、本稿では、果たして国民一人一人にそのような同一性ないし一体的な意識が共有されているのかということを知ることにする。そこで、個々人が唱歌教育や唱歌に対してもちつづけている記憶や、それらを通して日常生活や国家をどのように捉えるようになったのかという個々のイメージ＝

意識を検討するべく、そのような人々の記憶や意識のことを「国民意識」という表現で捉えることにする。

では、次章以下で、上記で設定した課題を実証的に検討するために、我が国の唱歌教育が尋常小学校の教科として制度的に必修扱いになり、また実質的にも全国的に授業が行われるようになった大正中期から昭和初期にかけての時期を対象に、その時期に尋常小学校に通った人々へのアンケートとインタビューのデータをもとに、彼らの唱歌教育の記憶を考察していくことにしよう。

II. 調査の概要

前章で設定した、人々の唱歌教育と唱歌の受容と消費の実態を明らかにするという課題に取り組むべく、以下のような概要で、1998年度にアンケート調査とインタビュー調査を実施した。

アンケート調査の概要は以下のとおりである。

調査地：長野県上伊那郡高遠町

調査対象者：1913（大正2）年度生まれ（85歳）から1932（昭和7）年度生まれ（66歳）まで⁵⁾

調査実施時期：1998年6月

サンプルケース数：300ケース

抽出方法：年齢別住民台帳より無作為系統抽出
(1998年3月実施)

アンケート調査方法：郵送法

回収数：113票（回収率37.7%）

調査地として、高遠町を選定した理由は、長野県が明治期より学校教育の普及に力を入れてきた教育先進県であったことに加えて、高遠町が山あいに位置し、明治政府の公的制度の導入は行われても、それ以外の大衆文化の普及が必ずしも進んでいわけではなく、学校教育の影響のみをより取り出しやすいと考えられるからである。さらに当地は、我が国の音楽教育の創始者である伊沢修二の出身地であり、唱歌教育が早くから広範囲に普及していたのではないかと、そうであれば典型的な例として唱歌教育の影響をより取り出しやすいのではないかと想像されたこと⁶⁾、調査の依頼にあたり、教育委員会をはじめとする町の公的機関や町民の理解が得やすいと考えたことからである⁷⁾。

調査対象者は、現在高遠町に住んでいる人から選んだため、必ずしも当該時期に高遠町内にあった小学校（高

遠尋常高等小学校、河南尋常高等小学校、長藤尋常高等小学校、藤沢尋常高等小学校、三義尋常高等小学校）の卒業生であるとは限らない。しかし、上記の調査地選定の理由にもかかわらず、本稿の課題で重要なことは、ある尋常小学校で、どのような唱歌科の授業が行われていたかということではなく、当該時期に尋常小学校に通っていた人々が唱歌教育や唱歌にどのように関わっていたかということなので、本稿では、尋常小学校ごとの特徴や違いにはこだわらずにデータを検討することにす⁸⁾。

インタビュー調査は、アンケート調査の回答者のうち、さらにインタビュー調査を行うことを承諾してくださった方のなかから、アンケート調査の回答の質や、年齢分布、地域性を考慮して、15名のインタビュー者を選定して行った。インタビュー調査依頼の結果、インタビュー調査を設定した数は14件だったが、実際には、配偶者や友人などが参加するケースなどもあったため、インタビュー総数は30名を超えている⁹⁾。なお、結果論ではあるが、当初選定したインタビュー者のなかには、教員経験者が3名ふくまれており、うち1名は唱歌（のちに音楽）科の教員であった。

アンケートは3つの骨子から構成されている。第一に、通っていた尋常小学校に関する記憶。主に学校の成り立ちや行事や先生のことについての記憶を尋ねた。

第二に、唱歌科の授業に関する記憶。まず、授業の実施状況、担当教師、授業場所、授業時数、教科書使用の様子、楽器使用の様子など、授業の事実レベルでの確認を行った。また、どのような授業をしたのか、進め方や内容について、授業で扱った唱歌とその歌詞の説明内容について尋ねた。さらに、好きだった唱歌についてその理由などを尋ねた。その他、学校行事にからめて校歌や式歌についても尋ねた。

第三に、日常生活における音楽経験の記憶。学校外でどのような歌をうたったか、家庭での音楽接触の様子や家族の音楽行動の様子、地域での音楽活動の様子などを尋ねた。

インタビューでは、唱歌科の授業に関する記憶を中心に、アンケートと同じ内容について、アンケートに対するインタビュー者の回答にそってさらに深く尋ね、また唱歌と式歌との関係についても尋ねた。

III、IV章での考察では、以上の調査に基づくアンケート結果とインタビューデータをもとに、唱歌教育と唱歌の受容と消費の様子について検討する。なお、アンケー

ト結果は、ほとんどが自由記述の回答のため、数量的に正確な統計処理を施すことはしない。また、インタビューデータは、録音を拒否した調査対象者も少なからずいたため、本稿では基本的にノートに書き取ったデータを使用する。

Ⅲ. 唱歌教育と唱歌の受容

A. 唱歌科の授業実施状況と授業構成

音楽人類学や音楽社会学的にみれば、音楽が社会統合の機能を果たすのは、歌唱や演奏を一緒にしたという行動経験の共有によるものであると考えられている。そこで、唱歌科の授業ではどのように歌唱という行動経験を共有していたのかを確認する必要がある。また、唱歌科の授業構成が、報告者が先に検討した教授法の解説書に示されていた教案と同じような構成だったのかどうかを確認する必要がある。

1. 唱歌科の授業実施状況

まず、アンケート調査に基づいて、授業の実施状況、担当教師、授業場所、授業時数、教科書使用の様子、楽器使用の様子といった、授業の事実レベルでの確認をしておこう。

唱歌科の授業の実施状況について、学年ごとに唱歌科の授業があったかどうかを「あり」「なし」の二者択一で確認した。大正一桁年代生まれの調査対象者のなかには、1、2年生の時期には「なし」と回答したものが散見された。全体を通して低学年の時期の記憶があいまいで、未記入がめだつものの、尋常小学校の6年間を通してまったく「なし」という回答は1例もなく、大正時代後半には、長野県では高遠町をはじめ、山あいの農山村にまで広く唱歌教育が普及していたと考えられる。

唱歌科の担当教師について、学年ごとに「担任の先生」「唱歌の先生」「その他」のいずれであったかを確認した。もっとも多くみられたのが6年間通して「担任の先生」に習ったという回答だった。反対に6年間通して「唱歌の先生」に習ったという回答は非常に少なかった。また、低学年の間は「担任の先生」に習っていたが、3年生以上の高学年になるにつれて「唱歌の先生」に習うように変わっていくケースも非常に多くみられ、またごくまれに、6年間の途中の何年間かだけ「唱歌の先生」に習うケースもみられた。こういった回答パターンの違いは学校差というよりも、同じ尋常小学校であっても回答のパターンに違いがみられることから、師範学校や唱歌講習会で唱歌教育の素養を身につけた教師とそうでない教師とが混在しており、担任が唱歌科の指導が

できたかできなかったかという違いによるものとみることができよう¹⁰⁾。

唱歌科の授業場所について、学年ごとに「教室」「講堂」「音楽室」¹¹⁾「その他」のいずれであったかを確認した。もっとも多くみられたのが6年間を通して「音楽室」だったという回答だった。反対に、6年間を通して「教室」だったという回答や、「講堂」や「その他」で授業を行ったという回答もほとんどなかった。低学年の間は「教室」で、高学年になるにつれて「音楽室」を使うようになる例も一定程度みられた¹²⁾。

唱歌室の様子について、1922（大正11）年度生まれのインタビュー어의自伝にはこのように書かれている。

「一年生の教室の西側は二年生の教室、その隣は工作室、その次が唱歌室になっていて、長い腰掛けとオルガンが置いてあり、並んでいた順番に唱歌の時間の座席が決められた¹³⁾。」（北原1998 80頁）

授業時数について、各学年ごとに1週間に何時間授業があったかを自由記述で確認した。事実確認の項目のなかではもっとも記憶が定かでない項目で、未記入がめだつた。6年間を通して週に1時間または2時間というケースがもっとも多くみられたが、0.5時間から5時間まで幅広い回答があった。学年によって違うケースもみられ、低学年から高学年になるにつれ、減っていくケースも増えていくケースもあった。また、とくに注目すべきは、1、2年生の間は「適当だった」「色々」「不規則」といった回答が少なからずみられたことである。これは、法規定上、3年生以上では唱歌科を週何時間と定められているのに対して、1、2年生では、唱歌科と体操科とを合わせて週何時間と定められており、時間数に関して柔軟な対応をとることができたこと、または唱歌科と体操科の教育内容には類似する特徴があるため、明確に区別されていなかったことを反映しているものと思われる。

教科書や楽譜の使用について、「歌を練習する際に、教科書や楽譜をお使いになりましたか。」と尋ねて確認した。回答のあったもののうち、3割ほどが「いいえ」と回答しており、これは、口授法を用いたか、歌詞や楽譜を板書したものと思われる。インタビューによれば、教科書や楽譜を使用したばあいでも、本に綴じた教科書が配られたケースはほとんどなく、下級生の間は歌詞を板書したうえで口授法を用いることが多く、上級生になるにつれて、1曲ごとにガリ版刷りした譜面を渡されたとのことである。また楽譜を渡されても、楽譜の読み方

を教わることはほとんどなかったようである。

楽器の使用について、「歌を練習する際に、伴奏のためにオルガンなどの楽器を使われましたか。もし使われたとしたら、どんな楽器でしたか。」と尋ねて確認した。回答のあったもののうち、「使わなかった」という回答は皆無で、もっとも多く使用されていた楽器はオルガンだった。ピアノを用いたという回答も2割ほどあり、オルガンとピアノの両方を用いていたケースも散見された。インタビューによれば、大正末期から昭和初期の時期に、高遠尋常高等小学校にはピアノがすでにあり、オルガンが各教室に置かれ始めていたこと、長藤尋常高等小学校には、東京で社会的経済的に成功を収めた卒業生からグランドピアノを寄贈されたことが明らかになっている。

2. 唱歌科の授業構成

次に授業構成について確認しよう。アンケートでは、唱歌科の授業構成についてどのような記憶があるかを確認するために「唱歌の授業は、なにが、どのように行われましたか？ 授業の進め方や内容などで、覚えていらっしゃるものがございましたら、お書きください。」と尋ねた。

この質問には66名がなんらかの回答をした。

授業の構成については、例えば次のような回答が得られた。

「曲の基本のドレミファソラシドを最初に練習した。」

「先生が歌詞のお話、はじめに歌って下さる。音符の読み方、階名、音名、何回も何回も音符練習してようやく歌に入りました。」

「先生がオルガンを弾き、黒板に譜を書いて行った。」

「まず先生が歌って生徒は先生の歌ったようについて歌い、ひと通り歌えるようになると、オルガンに合わせて何度も何度もくり返し覚えたものでした。」

「春の小川を3年生だったかと思うが、楽譜にそった歌詞を印刷してもらい、楽譜にそって階名の指導に続いて歌唱指導が行われた。」

「①楽譜が書かれた掛け軸を黒板にかける、黒板には五線譜が書かれている

②先生がオルガンをひきながら歌う

③1小節ずつ生徒が歌う

④注意する所など説明

⑤全員で歌う」

また、扱った活動としては、次のような回答が得られた。

「ほとんど単旋律のもので合唱は教える程 その指導もなかったし 今思えば残念」

「二部合唱 三部合唱もありました」

「1年に1度の音楽会があってそれに合わせて練習をしました。独唱とか合唱ということでした。」

「器楽指導も全然なかった」

「アコーディオン、太鼓など使って合奏した記憶があります」

「5年生に唱歌の先生になってから音符の読み方、何拍子などととても難しくなった」

「とくに音楽だけを聞き想像しながら聞く音楽など楽しかった（魔王など）」

なお、インタビュー調査でも授業構成と扱った活動について確認している。

アンケート結果とインタビューデータからは、唱歌科の授業構成に学校や教師による大きな違いはみられなかった。それに対して、扱った活動については、単音唱歌のみのケースから鑑賞を行っているケースまで差異が大きかった。インタビューデータによれば、河南尋常高等小学校には、大正中中期以降、音楽に造詣の深い教師がおり、その教師に唱歌を習ったばあい、歌唱ばかりでなく、上述したアンケートの抜き書きの最後の例のような鑑賞を行ったが、その教師がいなかった大正中中期以前または昭和初期以降には行われていなかったことが明らかになっている。このことから、扱った活動の差異は、学校差ではなく、教師による違いであると考えられる。

以上から、授業の構成は、実際に教授法の解説書などに示された教案とほぼ同じような進め方をしていたことが明らかになった。詳細にみていくと、授業のはじめには音階練習や発声練習が行われた。その次に行われる歌唱指導では、明治時代に主流だった1節ごとに教師が範唱し、児童がそのあとに続いて歌うという練習のくり返しを経て、最終的に1曲を通して歌えるようにし、最後に斉唱で締めくくるという方法がとられていた。

また、尋常小学校では「平易ナル歌曲ヲ唱フルコトヲ得シメ」という音楽教育上の目標が設定され、斉唱を行うのが規定された活動の中心だったが、実際には、教員によってはこの頃すでに合唱を行ったり鑑賞や器楽の指導を行ったりしていたことが明らかになった。

音階練習や発声練習については、インタビューで改め

て確認したところ、忘れていた人もいたが、歌唱練習で1節ずつ口授法で進んだこと、何度も斉唱をしたことはほとんどの人が覚えていた。歌唱という行動経験の共有が、50年以上経った今日に至っても記憶されていることが明らかになった。

B. 唱歌の歌詞に関する説明内容

筆者が先に検討したように(西島1997)、教授法の解説書の教案例では、多くのばあい、歌唱練習に入る前に、新しい曲の歌詞に関する説明や問答をすることになっている。園部・山住(1962)は「歌詞内容を子どもたちの『脳髄ニ感覚』させるのに効果的な方法」としてこの点に注目し、教師と児童の間での歌詞内容に関する問答を通して公定イデオロギーを伝達したと論じている。

では、実際に唱歌科の授業の際に唱歌の歌詞内容に関する説明があったのだろうか。またもしあったとして、唱歌科の授業を受けた人々は、その内容を「脳髄ニ感覚」させられたのだろうか。そこで、歌唱練習の際の歌詞に関する説明内容についてどのような記憶があるかを、アンケートでは「歌を練習する際に、歌詞の内容について、先生はご説明になりましたか。もしなさったとしたら、その中で覚えていらっしゃるものがございましたら、曲名とご説明の内容をお書きください。」と尋ねて確認した。

まず、「はい・いいえ」で、説明の有無を回答してもらったうえで、自由記述でその内容を回答してもらったところ、「はい」と回答した、またはその回答欄に回答はなくても自由記述の欄に、説明があった旨を回答したのは43名だった。さらに、説明内容を自由記述で回答したのは23名にすぎなかった。

説明があったと回答しておきながら、その内容を回答しなかったケースは

- 「多少の説明はありましたが、早く歌いたい気分でしっかり聞いていなかったように思います。」
 「たしか先生が説明はしてくれたような気がいたしますが、忘れてしまいました。」
 「もう昔の事で余り覚えがありません。」

のように、説明を聞いていなかったり、忘れてしまったりしていたものがめだった。

説明内容を回答したケースでは、次のような回答がめだった。

「春が来た 秋 冬景色 春とか秋とか季節を大事にお話になりました」

「おぼろ月夜 菜の花島に入日うすれ
見渡す山のはかすみふかし
はの意味を知らずに唱っておりましたが、説明があり、成程と覚へ今以てなつかしく思い出します」

「春が来た ただうたわず、春がきた、若芽が出て夏になると花もさき、大きくなだなあと思いだしてうたうともっと良くなるなあ、なんのうたでも同じ、とよく話してくださった」

「青葉茂れる 正成や正行の話を聞いたような気がする

大黒様 わにざめとうさぎの話
児島高德 島流しされるときに院の庄に泊まった朝の話」

「高遠唱歌 高遠城を中心として高遠のことを説明してくれました」

これに対して、いわゆる天皇制イデオロギーや軍国主義的ナショナリズムに関わるような説明については

「国歌 意味がわかるように説明してくれた」

の1ケースだけだった。

歌詞内容の説明に関する記憶の特徴としては、「いいえ」と回答したケースも22ケースしかなく、授業構成に比べて回答数が少ないことが挙げられる。残りのケースは歌詞内容に関する説明があったかどうかを覚えていないのである。

また、覚えていて説明内容を記述したものの特徴をみると、天皇制イデオロギーや軍国主義的ナショナリズムに直接かかわる説明を挙げたケースはわずかに1ケースで、残りは、歌詞のなかに描かれた情景と、実際に日常生活やそのなかでみかける情景とを関連させるようにする説明や、高遠町や日本の歴史についての説明に関する記憶がめだった。

このことから、歌詞内容に関する説明は、山住らが論じた公定イデオロギーを「脳髄ニ感覚」させる役割を果たしたとは言い難いといえよう。

C. 唱歌と式歌との関係

前節までにみたように、唱歌科の授業の記憶として、天皇制イデオロギーや軍国主義的ナショナリズムにかかわるような指導を受けた経験を直接的に挙げるケースはほとんどなかった。しかし、実際に戦前の学校では、学校行事や四大節の際に君が代や各式歌や校歌などを歌う機会があった。そこで、受容の観点からは、式歌をどのように覚えたのかを明らかにする必要がある。これらの点について、アンケートでは、「校歌について、なにか覚えていらっしゃるかがございましたら、お書きください。」「学校行事のときに歌を歌われたことがございましたか。歌われたとすると、どのような行事のときにどのような歌を歌われましたか?」「校歌や学校行事のときに歌う歌は、いつ、どのように練習なさいましたか。」と尋ねた。

本稿ではその回答の詳細な検討は行わないが、大半の調査対象者が、校歌や式歌に関するなんらかの記憶を回答していた。それによると、学校行事としては、運動会や遠足の際に歌を歌う機会があったこと、また四大節の際にはそれぞれの式歌を歌ったこと、それらの歌の練習は、式が近づくと朝礼の際に全校で合わせて練習をしたことなどが明らかになった。

アンケートでは、式歌を唱歌科の授業の際に練習をしたかどうかについては、あまりふれている回答がなかった。そこでインタビューの際にその点を確認したところ、低学年の間はやったかもしれないが、毎年のごとで自然に覚えていたので、改めて唱歌科の授業の際に練習をしたかどうかは覚えていない、という回答が多かった。

これらの結果からは、君が代や式歌や校歌については、ほとんどの調査対象者がそれらの歌を歌ったという経験の記憶をもっている一方、唱歌と式歌では習い方が構造的組織的に違っており、受容のしかたが異なっていたということがいえそうである。

IV. 唱歌教育と唱歌の消費

A. 好きな唱歌について、好きな理由や思い出

I章で検討したように、人々がある歌を知っていること、そして、同じ国に住む人々がその歌を自分と同じように知っていることを認識していることによって、人々はある国のもとに統合され、国民としてのアイデンティティをもつと考えられている。しかし、人々がその歌をとおして同じイデオロギーのもとに、同じナショナリズ

ムをもって統合されているかどうかには疑問が残る。もし仮に唱歌－歌詞や旋律－が人々の間に共有されていたとしても、そのことだけで人々に一枚岩的なイデオロギーやナショナリズムを確立させて国民統合の役割を果たしているといえるのだろうか。

そこで、アンケートでは「小学校で習った歌のうち、とくにお好きだったものはなんでしたか?またその理由や思い出などがございましたら、お書きください。」と尋ねた。インタビューに際しても、同様の質問をしている。

アンケートによれば、多くの人が、今日でも歌い継がれていたり、実際に共通教材として小中学校で習うことが義務づけられたりしている唱歌を好きだった唱歌として挙げている。しかし、その好きな理由やその背後にある思い出は必ずしも一致するものではない。

アンケートでは紙幅の関係もあって必ずしも理由や思い出を十分に書きつくしているとはいえないので、ここではインタビューデータを中心に検討しよう。

(1)学校の思い出とつながっているケース

唱歌が学校で習うものであることから、学校での思い出とつながって、好きな唱歌を挙げるケースがめだつた。

・1912(大正元)年度生まれのインタビューイは、インタビューをお願いした調査対象者の近所に住む女性であり、昔のことをよく覚えているということでご紹介いただいた方である。彼女のばあい、唱歌の記憶は、小学校での運動会の記憶とつながっていた。《港》《天然の美》《荒城の月》などの唱歌名を挙げて、それらを運動会の遊戯の伴奏曲として使ったことを覚えており、遊戯の振り付けまで覚えているということだった。運動会ではかけっこでいつも一番だったために、よい思い出として記憶されており、その記憶と相俟って、上記の唱歌が好きな唱歌として思い出されるようである。

・1927(昭和2)年度生まれの男性は、学校の思い出でもややネガティブな記憶とともに好きな唱歌を挙げてくれた。彼のばあいは、毎年3月に学校行事として行われる唱歌会で、小学校2年生のときに《うさぎ》を独唱をした。みんなの前で台に乗って歌うのは初めての経験で、目がくらんで歌うのに必死だったそうである。

(2)日常生活とつながっているケース

もっとも多く好きな唱歌の理由や思い出として挙げられたのが、日常生活とつながっているケースであった。

- ・1928（昭和3）年度生まれの女性は、《春の小川》《おぼろ月夜》など季節感あふれる唱歌を好きな唱歌として挙げた。とくに春を題材にした唱歌は好きだそうである。春を題材にしたものが好きな理由として、彼女が農家の生まれであり、現在でも農業を営んでいることが挙げられていた。

「農家なので、冬を越して春になると、うれしい。これから、という楽しさ、うれしさを感じた。今でも自分で畑に行って野良仕事をしながら「おぼろ月夜」などを歌う。」

というように、子どもの頃の春の楽しさは忘れられないそうである。

- ・1924（大正13）年度生まれの男性もまた、いくつかの好きな唱歌として《春の小川》や《おぼろ月夜》をあげている。彼のばあいも《春の小川》が好きな理由は、草で「かんじ舟」という舟をつくって、田んぼの水路でみんなで舟を流して競争して遊んだ思い出とつながっており、日常生活と密接である。しかし、《おぼろ月夜》が好きな理由は、「(1)学校の思い出とつながっているケース」にあたり、先生が力をいれて教えてくださったので、とくに印象に残っているからとのことだった。

(3)夢やあこがれとつながっているケース

数少ない例ではあったが、《ウミ》や《我は海の子》といった、長野県では絶対にみられない情景を扱った唱歌を好きな唱歌として挙げるケースもあった。

- ・1930（昭和5）年度生まれの女性は、《ウミ》《港》《スキー》といった唱歌を好きな唱歌として挙げている。こういった唱歌は先生の選曲で、生活に密着した《村の鍛冶屋》などの唱歌を扱うことは少なかったそうである。海は長野県にはないため、また、南信は北信のようにスキーをすることは当時はなく、スケートをしてきたため、海やスキーには強いあこがれをもっていたそうである。海に関しては、6年生のときの先生が新潟県出身だったため、連れていってもらい、海に行ったときは、飛んでいって海の水をまず最初になめたそうである。

(4)趣味や嗜好性とつながっているケース

趣味や嗜好性とつながっているケースとして、歴史的事実を題材にした唱歌を好きな唱歌として挙げるケースや、特定の旋律上の特徴をもつ唱歌を挙げるケースなどがあった。公務員の家庭に生まれた女性が前者の一例であり、後に音楽の教師になった男性が後者の一例である。

このようにみえてくると、同じ学校で習った唱歌で、今日でも歌い継がれていたり、学校教材としていまだに扱われている唱歌を好きな唱歌として共通して挙げていても、その背後には一人一人異なる家庭環境、経験、趣味、嗜好性などがあり、それらと個々の唱歌とがつながっていることがわかる。

それは、複数のインタビューに集まっていたインタビューを進めている際に顕著に現れる。

ここに挙げる例は、1916（大正5）年度生まれのインタビュー（男性）が、会長を務めている老人クラブのメンバーと一緒にインタビューに臨んでくださった際のことである。

好きだった唱歌をうかがっていたところ、日常生活と関わりのある唱歌として《せいくらべ》を挙げたインタビューがいた。それに対して他のインタビューが好きだったけれど歌詞を忘れたというので、誰かが歌い始めたところ、声を合わせ始め、結局はみんな正確に歌えたのであった。

ところが、日常生活に密接であるというところから《となりぐみ》が好きだったとあるインタビューが思い出を話したところ、他のインタビューが「あれはもう戦争の…」と喋ってしまっただけで、また、《船頭小唄》が好きだった理由として、あるインタビューは軍隊経験を挙げる一方で、別のインタビューは、小学生の頃に住んでいた地域の環境から、大人や青年が歌っているのを聞いていてどういう意味かわからないまま面白いので覚えてしまったと述べた。

このように、ある唱歌の思い出を話していて、その唱歌じたいが好きだという点で一致しても、その理由を説明し始めると、個々人の経験や嗜好性の違いが顕著に現れてくるケースがまみられた。このことは、ある唱歌—歌詞や旋律—を覚えていたり、思い出したりすることができるということ、それを個々人の家庭環境、経験、趣味、嗜好性に依拠して唱歌—歌詞や旋律—をどう意味づけているかということ、つまり受容と消費との間には隔たりがあるということができるとは限らないだろうか。

B. 唱歌と式歌の関係の捉え方

I章で述べたように、筆者は、ナショナル・アイデンティティにはカントリー意識とネーション意識というふたつの側面があると仮説的に論じてきているが、唱歌や式歌を通して伝達される公定イデオロギーや文化的規範によって、どのようにふたつの側面からなる国民意識が形成されていると考えられるのだろうか。この点については、消費の観点から、唱歌と式歌の関係をどのように捉えていたのかを明らかにする必要がある。唱歌と式歌との関係については、アンケートでは直接聞くことはしていない。そこでインタビューの際に尋ねたところ、例えば次のような回答がかえってきた。

式の歌と唱歌で習う歌は別。式の歌はふだん歌っちゃいけない。《君が代》なんかはふつうの歌で歌っちゃいけないと思っていた。唱歌はいく人かそろりと歌ったような覚えはあるが、音楽は好きではなかった。しかし式歌はきちんと覚えるものだと思っていた。(1924 (大正13) 年度生まれ 男性)

《君が代》や四大節の歌と《春の小川》のような唱歌とは全然別である。式歌は、やたら歌うとか口ずさむなんてことは絶対ない。たまに思い出すことはあっても口に出すことはほとんどない。小学生の当てもふだんは口に出ない、厳粛なものにとらえていた。やたら歌うことではない。(1928 (昭和3) 年度生まれ 女性)

この、式歌は、ふだんは口にしない歌である、きちんと覚えるもの、厳粛なものという捉え方は、唱歌と式歌との関係について尋ねた調査対象者すべてに共通していた。

一方の唱歌については、例えば、アンケート結果によれば、

「唱歌の授業はみんなよろこんだ

むずかしいことは考えずに

先生と一緒に歌って自然となごやかな気持ちになれた

学校の往復に大きな声で歌ってみんなで仲良く通学できた」

(1920 (大正9) 年度生まれ 男性)

と、記憶しており、式歌とは正反対の捉え方をしていることがわかる。

このように、唱歌と式歌とは児童の間でも明確に使い分けて捉えられていたといえよう。

V. 考察

以上、2章にわたってアンケート調査の結果とインタビューデータから、①唱歌科の授業実施状況、②唱歌科の授業構成、③唱歌の歌詞に関する説明内容、④唱歌と式歌との関係、⑤好きな唱歌について、⑥好きな理由や思い出、⑦唱歌と式歌の関係の捉え方の7項目に関して、人々の唱歌教育の受容と消費の実態を検討してきたが、ひとまずそこからは次のようなことがいえそうである。

まず受容の観点から考察していこう。

唱歌科の授業構成は、教授法の解説書などに示された教案とほぼ同じ構成で行われていた。そして、多くの人が斉唱を行ったことを覚えていた。また、忘れたと思っていた唱歌も、みんなで斉唱をするうちに思い出すことができた。その一方で、歌詞内容に関する説明は、説明があったかどうかじたいを忘れてしまっている人が多く、あったことを覚えていても、その内容までは覚えていないケースがめだつた。また、その歌詞内容の説明そのものも、季節や日常生活や町や日本の歴史に関わる説明は覚えているが、公定イデオロギーに関する説明を覚えているケースは非常に少なかった。

このことから考えるに、アンダーソンが論じたように、斉唱、つまり全員で唱歌を歌ったという行動経験を通して、唱歌が人々の間で共有されているということは想像できたかもしれない。その意味で、人々がみずから国民であると意識したり、唱歌を共有している人々のことを同じ国民と意識することはできたかもしれない。しかしながら、歌詞内容の説明によって人々にナショナル・アイデンティティを確立させたり、天皇制イデオロギーや軍国主義的ナショナリズムといった公定イデオロギーを内面化させたりしたという従来の説明は成り立ちそうにない。

次に消費の観点から考察していこう。

唱歌にまつわる思い出や好きな唱歌の理由には、さまざまなパターンがあり、そのパターンには、個々人の育った家庭環境、経験、趣味、嗜好性などが影響しているといえそうである。つまり、従来の政治学的な内面化図式では説明できず、社会学的ないし社会心理学的な検討を要する要因によって個々人の消費パターンは構成されていると考えるべきである。

このことから、もし仮に斉唱という行動経験から、

唱歌—歌詞や旋律—の共有によって、国民の一体感というものができあがったり、一枚岩的なナショナルリズムを形成したりしているということが人々の間で想像されたとしても、その実、個々にみていったばあいには、その一体感の源である唱歌—歌詞や旋律—はまったく異なる理由や思い出によって消費されながら、人々の間に共有されているものだということがいえそうである。

人々の意識を唱歌教育と唱歌の受容と消費という実態レベルの観点で捉えるならば、公権力の意図とは異なる受容のされ方と個々人ごとにまったく異なる消費のされ方をしている唱歌は、その歌詞と旋律じしんと、人々が唱歌を斉唱するという行動経験じしんによって、あやうく国民統合を維持しているにすぎないのかもしれない。つまり、一人一人にとってひとつひとつの唱歌—歌詞や旋律—の表象するものや意味するものは違うにもかかわらず、その唱歌—歌詞や旋律—それじしんによって、そして、あの人とは唱歌—歌詞や旋律—を共有しているはずだという相互に無確認の認識と理解において、たまたまお互いを同じ国民だと想像しあっているにすぎないのではないだろうか。

以上のように、本稿では、「国民統合のための装置や実践に人々がどうかかわっていたのかという、受容と消費の実態と、それによるヘゲモニー形成の様子を明らかにすること」という課題のうち、受容と消費の実態に焦点をあてて、唱歌教育や唱歌を通して人々の間に国民意識がどのように形成されてきたと考えられるかということを検討してきた。

今後は、第一に、唱歌と式歌は別のものとして捉えられていたことが明らかになったことをふまえるならば、唱歌と式歌を通して、ナショナル・アイデンティティのカントリー意識とネーション意識のふたつの側面は、別々に形成されている可能性があると考えられる。そうであるならば、唱歌と式歌それぞれに確立されていくふたつの側面がどのように一致していき、ナショナル・アイデンティティを形成していくのかということを検討していく必要がある。第二に、実態レベルでは個々人によってさまざまに異なる国民意識が、集積された意識としてまとまったとき、どのようにヘゲモニーを形成し、確固とした国民統合の基盤としてのナショナル・アイデンティティを構築していくのかということを検討していく必要があるだろう。

註

- 1) 「唱歌」とは、狭義には文部省唱歌を指す言葉であると考えられるが、一般には、明治以降につくられた歌のうち、文部省唱歌がつくられる以前から学校で歌われてきた歌や童謡や日本歌曲などもふくんで広義に使われることが多い。本稿の調査対象者の多くも、そのような広い概念で捉えており、本稿では広い概念で「唱歌」を捉えることにする。
- 2) ネーション意識とカントリー意識の定義について、筆者は次のように定義した。(西島1995b)
 - <ネーション意識>：複数の政治的共同体のなかで、他者に対して自己主張するとき、例えば支配者集団によって方向づけられたイデオロギーや伝統のような特徴を、ヘゲモニーとして認知的に感じとるレベル。具体的な指標としては、制度や儀礼、伝統などがふくまれる。これは、他の政治的共同体との明確な区別のために用いられる国民一体性の意識であり、政治的共同体の主権と国境線に対する意識が内在している。
 - <カントリー意識>：人々が自分の生活している場とその仲間を、自然発生的な共同体とその構成員であるという意識をもつときに、言語的・領域的・文化的要因が組み合わされた生活様式の同一性を共同意識として、視覚や聴覚などを通じて感覚的に感じとるレベル。具体的な指標としては、偶然以外には象徴的な機能をもたないルーティーンにふくまれる前近代的共同体の人間形成機能とその諸要素が考えられる。ここには、集団内の言語、文化的伝統、生活様式といった文化的属性が共有されているという意識が内在している。
- 3) なお、この課題は、西島(1997)ですでに提示しており、次稿以降の課題としてその際は検討を留保していたものを、若干修正したものである。
- 4) 従来の唱歌教育に関する歴史研究もまた、広田の批判するところの「内面化」図式を採用して、論を展開してきていたことはいくまでもない。
- 5) ここでいう年度とは、学事年度のことであり、年齢は実年齢ではなく、該当年度に達する満年齢である。
- 6) しかしながら、これまでの調査からは、実際に他の地域より唱歌教育の普及が格段に早かったり広範囲にわたっていたりしたという証拠は得られていない。
- 7) 実際、高遠町での調査の依頼にあたっては、東京芸術大学音楽学部の佐野靖助教授に高遠町教育委員会の学校教育係長をご紹介いただいたおかげで調査の実施に至った経緯がある。また、高遠町教育委員会の方々には調査の実施にあたり、格別のご配慮をいただいた。さらに、調査をお願いした町民の方々には、この種の調査としては非常に高い回収率をあげているように、調査の趣旨をご理解いただき、快くご協力いただくことができた。この場を借りて、佐野先生、高遠町教育委員会関係者の方々、調査にご協力くださった町民の方々に深くお礼申しあげる。
- 8) 筆者は「ネーション意識」と「カントリー意識」の定義をはじめに行った際に、両者がどのように相互補完して、ナショナル・アイデンティティを確立していくことになるのかという、その方法について検討した。(西島1995a)ここでは3つのパターンを示しているが、そのひとつが、公権力と人々との接点において実態レベルで検討されるべきパターンであった。なぜなら、公権力と人々との接点に位置する学校のような国民統合装置は、両者をつなぐエージェントとして一定の自立性を有している場合があるため、つまり学校のばあいなら両者を媒介する教師の果たす役割を無視することができないのである。その意味で、公権力と人々と教師の三者が織りなす相互作用について検討する必要があり、その際には、ある特定の尋常小学校では、どのような唱歌科の授業が行われていたかということ

三者間の相互作用を読み解く手がかりとして検討することになる。今回の調査の過程で、何人かの音楽教師にインタビューすることができ、また当該時期に一部の調査対象者に唱歌教育を施した教師がご存命であることもわかった。そこで、ある特定の尋常小学校の唱歌科の授業に焦点をあてて三者間の相互作用を明らかにすることを次稿以降の課題としたい。

- 9) なお、インタビュー調査は、再度インタビューをお願いしたり、雪だるま式に調査対象者を増やしたりしており、本稿執筆時点で継続中である。
- 10) 「唱歌の先生」には、純粋に唱歌科を専科で教えている教師を指すばあいと、唱歌の不得手な教師の担任する学級に唱歌科の授業を替わりにしにきた唱歌の得意な教師を指すばあいとがふくまれている。児童側からはその区別が容易にはつかないことがありえる。
- 11) 当時は、音楽教育の教科名が「唱歌」であったように、唱歌科の授業のために用いる特別教室も「唱歌室」といった。アンケートに際しては、筆者の不勉強から「音楽室」として尋ねたが、本文中で言及する際には「唱歌室」という表現を用いる。
- 12) インタビューや各小学校史によって確認したところ、高遠町内のいずれの小学校においても、当該時期の校舎にはすでに唱歌室が1室あった。しかし、当該時期には、全国的には唱歌科の授業を講堂や体操場で行うケースが少なからずみられ、高遠町の小学校の唱歌教育はかなり整備されていたとみることができよう。
- 13) これは、高遠町内の長藤尋常高等小学校の例であるが、他のインタビューの通っていた藤沢尋常高等小学校や長藤尋常高等小学校の分教場の唱歌室でも長椅子だったことが明らかになっており、唱歌室では長椅子を用いるのが一般的であったようだ。

参考文献

- Anderson, B. 1983 白石隆他訳『想像の共同体』リポート 1987。
- 広田照幸 1995 「<天皇制と教育>再考」『教育学年報4』世織書房 243-272頁。
- 唐沢富太郎 1956 『教科書の歴史』創文社。
- 北原正幸 1998 『若萌』ほおずき書籍。
- Merriam, A. P. 1964 藤井知昭他訳『音楽人類学』音楽之友社 1980。
- 西島 央 1995a 「学校音楽の国民統合機能—ナショナル・アイデンティティとしての『カントリー意識』の確立を中心として—」『東京大学教育学部紀要34巻』173-184頁。
- 西島 央 1995b 「想像の『にっぽん』—唱歌のつくった原風景」『教育学年報4』世織書房 433-466頁。
- 西島 央 1997 「ヘゲモニー装置としての唱歌科の成立過程—教案に示された授業実践の変遷を手がかりに—」『教育社会学研究60集』東洋館出版社 23-42頁。
- 園部三郎 山住正巳 1962 『日本の子どもの歌』岩波書店。
- 吉野耕作 1997 『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会。

[付記]

本論文は、平成10年度科学研究費特別研究員奨励費による研究成果の一部である。